

《翻 訳》

耕作を強制されるひとびと（一）

——ネパールの農業経済における奴隷的労働——

桐 村 彰 郎（訳）

（解説）

本稿は、ロンドンに本拠を置くアンチ・スレーヴァリー・インターナショナル（A S I : Anti-Slavery International）とカトマンドゥに本部のあるインセック（INSEK: Informal Sector Service Centre）というふたつの非政府組織（NGO）から、一九九七年に英語で出版された報告書（“Forced To Plough”）の翻訳である。一九九九年三月に全国大学同和教育研究協議会の第三回インド・カースト制度現地調査の一行は、インドに引続き国境を越えてネパール・カトマンドゥを訪問し、そのインセック本部で、その活動内容や問題の焦点になっていた奴隷的労働制度であるカマイヤ・システムについて説明を受けた。その一行のメンバーとして参加していた訳者は、帰国後も引き続きインセックのメンバーと情報を交換し、二〇〇〇年一月にカトマンドゥで開かれたカマイヤ・システム廃止のための国際会議に出席することとなった。その間、この報告書の執筆者のひとりであるシサム・ミシュラと知り合うことができ、入手した報告書を読んで、テライ平野におけるタルーの人びとを支配しているカマイヤ・システムや、ネパールのカースト制度と深い関係のある同様の奴隷的労働制度（ハリヤ・システム）についての詳細で平明な叙述に強い感銘を受けた。以後、訳者はインドとともにネパールのカースト差別（ダリット差別）の問題に深くかかわることになった。

紙数の関係でこれ以上の言及は控えることとするが、上記の事柄については、拙稿「ネパール国際会議報告記」（全国大学同和教育研究協議会『部落解放と大学教育』第一五号、二〇〇〇年三月）、「ネパールの奴隷的労働廃止に関する研究報告について」（同、

第一六号、二〇〇一年三月)、「ネパールにおけるタリットに対する差別の現状と課題」(『職業と世系に基づく差別の撤廃を——ターバン二〇〇一に向けて——』部落解放・人権研究所、二〇〇一年八月)、「ネパールのアンタタッチャブル」(国際身分制研究会『アジアの身分制と差別』解放出版、近刊)などを参照していただきたい。

なお、ネパールでは二〇〇二年二月、カマイヤの奴隷的労働を禁止する法律を制定し、また四月に全国タリット委員会も設置されて大きな一歩が踏み出されているが、国王、議会政党、マオイスト・ゲリラの三者対立の中で、土地改革をはじめとした農業改革、カマイヤやハリヤのリハビリなどの対策は依然として未解決の大きな課題になっていることを付け加えておきたい。

翻訳にあたっては、著者のアダム・ロバートソンとシサム・ミシュラ、出版元のASIとインセックの承諾を得ることができた。なお、訳出にあたって、写真や地図、また補遺(I-IV)などは割愛せざるをえなかった。この点諒解をお願いしたい。

耕作を強制されるひとびと

——ネパールの農業経済における奴隷的労働——

インフォーマル・セクター・サーヴィス・センターおよびアンティ・スレーヴァリ・インターナショナルのための報告

アダム・ロバートソン、シサム・ミシュラ

イントロダクション

第一部 ネパールにおける奴隷的労働

第一章 ハリヤ・システム…西部丘陵における奴隷的労働

第二章 平野部における債務奴隷制

第三章 カマイヤ・システム

第四章 奴隷的労働システムにおける女性と子供

第五章 日雇い賃金のハリヤ(以上 本号)

第二部 奴隷的労働の原因 (以下 次号)

第六章 地主と土地を持たない人びと

第七章 カースト、エスニック集団そしてアンタッチャビリテイ

第三部 変化への展望

第八章 南アジアの文脈における債務奴隷制

第九章 非政府組織の奴隷的労働に反対するイニシアティブ

第一〇章 政府の行動

第四部 結論と勧告

第十一章 結論と勧告

イントロダクション

外国の訪問者にとって美しい国だというイメージの背後で、ネパールの農村における生活はきびしい。女は荷物を担って腰を曲げ山道をあえぎながら歩き、動物のために飼料を、あるいは田畑のために肥料を運ぶ。男ははだして風雨にさらされ、雄牛とすきを使って長時間働き、古い農業のやり方を用いる。

品物や人々を運搬するやり方はたいいてい、依然として徒歩によっている。料理には煙い薪の火が用いられ、毎日多くの時間が燃料を集めることに費やされている。良質の飲料水が多くの地域ではなお問題になっており、水源はしばしば長い時間をかけねばならない遠方にある。夜は電気がないので、明かりは灯油ランプかあるいはろうそくにより、土地からなんとか生計をたてていくための闘いのうちに、毎朝が次の日をもたらししていく。

ますます多くの大人や子供が別の生活様式をもとめて都市へ移住するにいたるのは、このような日々の圧力なのである。ネパールの少女たちのなかには、カトマンドゥにおけるじゅうたん工場の、低賃金で長時間労働という工場状態は、家庭での絶えることのない退屈でつらい生活よりもむしろ望ましい選択肢となる者もいる。⁽¹⁾ 農場の多数は一年の数ヶ月家族を食べさせるだけの大きさ

であり、そのため家族の男性メンバーは労働する仕事をもとめて飢えの数ヶ月を移住し、かれらが帰宅できるものを送ることを余儀なくされるのである。

家族は生きるために一致団結しなければならず、拡大された家族システムは災難にたいする共同の保証なのである。家族やコミュニティのための高度の個人的自己犠牲や、隣人の寛大な行為や責任の分かち合いといった伝統がしばしば存在する。

すべてのネパール人は村落生活がきついということを認識しているが、それが、あるものにとっては他のものにとってよりもきつい、ずっときついということを知るものはほとんどいない。しかし、農村コミュニティもまた分裂したそれだという事実を免れることはできない。それはジェンダーや富やカーストで分裂しているのだ。さまざまなグループが緊密に編みこまれ、すべてのシステム内でその役割を果たすのかもしれないが、しかしそれらを結び付けあう紐帯は、しばしばうまくいって恩頼関係、最悪の場合は搾取関係にもとづいている。極端な場合この搾取関係は奴隷状態におちいるのである。

強力な諸家族がなお低地平野の大きなエリアで農村社会を支配しており、そしてかれらの所有地で生活する村人たちを利用した奴隷的労働や強制労働を用いている。西部丘陵では、奴隷的労働が、この地域で依然とても強力であって、若干のグループを奴隷的地位へと押しやるカースト・システムと密接に結合している。これら両者の構造がコミュニティを地主と農奴、ハイカーストと低カースト、搾取者と被搾取者への分裂へ導いてきたのである。

被搾取グループは変化をはじめには無力で、他の生活様式を知らず、現状を受け入れる以外の選択肢をほとんどもっていない。そのかわりに、かれらは被抑圧者の最後の逃げ場である生活への宿命論的アプローチを採用することによって、その地位を合理化してきた。地主やハイカーストは同じシステムに閉じ込められ、かれらの特権的地位を生まれによる権利として正当化する。その結果は、多くの農村社会と同様に、両グループは変化を疑惑の目で眺め、行動への責任を放棄して伝統の命令に従う、ということになるのである。

ネパールにおける奴隷的労働と奴隷制

ネパール王国の奴隷制は公式には一九二六年に廃止されたが、それはなお今日も一般的で、南アジアで一般に知られているように、債務奴隷制あるいは奴隷的労働の形をとっている。債務奴隷制は一九五六年に国連によって禁止された。国連の奴隷制度、奴

隷取引ならびに奴隷制類似の制度および慣行の廃止に関する補足条約（一九五六年）によれば、債務奴隷制度は以下のように定義されている。

…負債の保証として、自らの個人的役務もしくはその者の支配下にある者の個人的役務に関する債務者の誓約から生じる地位または状態であつて、合理的に評価したその役務の価値が債務の解除のために当てられていない場合、またはその役務の期間および性質がそれぞれ限定されず、また定義されていない場合。⁽²⁾

奴隷的労働は南アジア地域全体に共通する問題である。奴隷的労働を禁止する法律は現在インドとパキスタン両国に存在するが、ネパールは奴隷制度、隷取引ならびに奴隷制類似の制度および慣行の廃止に関する補足条約（一九五六年）に署名したにもかかわらず、その慣行を禁止する自身の国内法をまだ導入していない。

ネパール政府は現在債務奴隷制の形態が国内に存在することを承認しているが、それは数千人だけに影響をおよぼす西部ネパールの五郡に限定される問題だとみなしている。この報告は、奴隷的労働の問題は国の農村地域全体にわたりずっと広範に存在するという証拠を示している。

債務奴隷制により影響を受けている人びとの数についての調査はないけれども、それらは数十万と評価されている。けつして返済できないだろう借金にかかる利息の代わりにその労働生活を抵当に入れた男と女の数である。多くの場合、最初の債務が、産業化された社会の平均的家族がわずかにレストランの食事に支払う額に等しいだろうとは皮肉である。

ネパールー国のプロフィール

ネパールは非常に多様性のある国である。このことは地理学的な構造においても、エスニックの構成においても真実である。そこは東から西へと走る三つの別個の生態的地帯に整理される。インドとの国境から北へ旅すると、肥沃な低地平野、テライ地域を通り、シワリクやマハバラトの山並みの丘陵や溪谷を経て、ヒマラヤ山脈それ自体、チベットとの北部国境へのこのぎり歯のようなへりを形づくる八〇〇〇メートルの山頂に達する。丘陵地帯は最大の地域を占めるが、最も肥沃な土地は狭い細長いテライ

に集中している。山岳地帯は人口がまばらであり、それにおいて人口の八五%が丘陵やテライに住んでいる。

一九九一年国勢調査の記録では、約一八五〇万人の人びとが二〇程度の異なった言語を話している。過去のさまざまな段階で、ネパールの多くのさまざまなエスニック・グループを、ヒンドゥ・モデルにもとづく定式化されたカースト・システムに編入しようという試みがなされてきた。社会階層のヒンドゥ・システムは、なお国のたいの地域に存在し、特に農村地域において強い。バラモンやチェトリのハイ・カーストは、カトマンドゥ渓谷のネワールのハイ・カーストとともに、ネパールにおける最も強力なグループとして確立されている。

一八世紀中頃までネパールは多くの小さな公国に分かれていた。プリトヴィナラン・シャハ王が一七六八年に国を統一したその時期ののちにさえも、封建的政治はなお貧農の生活を支配した。彼が創設したシャハ王朝は、一八四六年に、エリート家族、自らを世襲的首相と呼んだラナ家に対して権力を喪失した。しかし、王家は名目上の頭首を維持しつづけ、二つの家族、シャハ王家とラナ首相家は結婚によって相互に結びつくようになった。

ラナ支配の世紀を通じて、ネパールはより広い世界との接触到抵抗して、国境外の発展から自らを切り離れたとの評判をとった。それは、臣従と奉仕を、王とラナ首相たちに負う強力な土地持ち家族たちによって統治されつづけた。それにもかかわらず、ネパールは戦後にインド亜大陸を襲った大規模な政治的变化を免れることはなかったし、その南の隣人、インドの影響は特別のインパクトを持っていた。

一九五一年、トリブヴァン国王と駆け出しのネパリー・ kongress 党は、ネルーのインドの支持を得てデモクラシーを国に導入しようとして試み、そして外国の外交使節が首都に入る権利を与えられた。トリブヴァン国王が一九五五年に死に、息子のマヘンドラが後を襲い、民主的憲法を導入した。そして選挙を行い、ネパリー・ kongress 党が勝った。しかしこの短い民主的中間劇は、マヘンドラ国王が首相を投獄し政府の支配を行った一九六〇年に、突然終わった。

一九六二年マヘンドラ国王はパンチャヤート体制をとって、そのもとで政党は禁止され、国は諸評議会の体制を通じて統治された。村落評議会が郡評議会のメンバーを選び、それが今度は国家的な支配機関、国家パンチャヤートのメンバーを選挙した。しかし、現実の権力は首相、内閣および国民議会のメンバーの四〇%以上を任命する国王にあった。舞台裏ではエリートの支配的家族

たちが恩頼体制を通じて権力を維持していた。この体制は、地元の有力家族たちが農村生活を支配しつづける村落レヴェルに至るまでずっと、パンチャヤート諸評議会の働きを通じて映し出された。

パンチャヤート体制はビレンドラ国王、現君主によって維持された。王冠の直接的権力は一九八〇年以後減少したが、政党は禁止され、その指導者は投獄されたままであった。

一九八九年地下の野党たちは国王を立憲君主とする多党制デモクラシーを迫るために連立を形成した。一九九〇年二月に政府は、催涙ガスや大量逮捕や拷問や殴打や残忍な力を用いて、非暴力的抗議を押しさえつけようと試みた。何ヶ月もの不安定が続くなかで、警察が非武装のデモ参加者の群集に発砲をして、数百人も多くが殺された。その結果、「民衆」運動が政府の強圧的戦術に対決し、新しいデモクラシーの時代がやってきた。

民衆運動を指導した二つの主要な野党、ネパール・コンGRES（NC）およびネパール共産党統一マルクス・レーニン主義者（CPNUML）が暫定政府を形成した。新しい政府は民衆運動の核心にあった二大要求、デモクラシーと人権の願望に忠実でありつづけた。かれらは国連の経済的、社会的および文化的権利に関する国際規約や国連の市民のおよび政治的権利に関する国際規約に迅速に加盟し、新憲法草案で頂点に達する民主的改革のプログラムを企てた。多党制選挙は一九九一年行われた。

ネパール・コンGRESが一九九一年選挙で勝ち、次の三年間権力についていた。しかし、一九九四年七月政府は議会で重要な投票に負け、首相の辞任を促し、もうひとつの総選挙に突き進んだ。これは明確な多数派には結果的にはならなかったが、最大議席をもつ政党、ネパール共産党統一マルクス・レーニン主義者（CPNUML）が組閣を依頼された。CPNUMLが九ヶ月権力についてたのち、ネパール・コンGRESが第三多数党のラストリヤ・プラジャタントラ党（RPP）およびネパール・サドヴァワナ党（NSP）との同盟を作り出し、一九九五年九月に共産党政府を打ち倒した。この連立パートナーは、内輪もめと内部権力闘争で特徴づけられる不安定な関係を、新たな連立政府ができる一九九七年初期まで続けたが、今度の新たな連立は、CPNUML、RPPおよびNSPから成り、権力の手綱を握ることとなった。

ネパールにおける奴隷制反対闘争

西部テライにおける奴隷的労働のカマイヤ・システムは一九六〇年代に人類学者がまず記録したが、そのシステムをさらけ出す⁽³⁾

行動がとられたのは、主に一九九一年の民主的改革以来である。これは、その分野で働く非政府諸組織（NGOs）の一握りの活動家によって指導された。かれらは、影響されたグループにエンパワーし、より広範な政府の活動を推し進めるためのプログラムを開始して成功した。

（報告で言及される諸郡〔地図上で示される〕略）

この作業の前線にあるNGOのひとつがインフォーマル・サーヴィス・センター（インセック）で、ネパールの人権とデモクラシーの保護と促進に献身するNGOである。一九九一年にインセックは最初のカマイヤ・システムの調査をおこない、この調査にもとづいてカマイヤ諸村落で識字と人権の授業をはじめ、奴隷的労働者の組織化を援助し、かれらが自分の権利を主張するのを助けた。

インセックはネパールの七五郡のうち三二で働く草の根諸組織のネットワークを通じて活動する。このネットワークを通じて、インセックは、カマイヤ・システムに加えて、国の他のエリアにおいて作動している類似の搾取的労働諸慣行があること指摘する情報を受け取った。

一九九四年に、ロンドンに基地を置く人権組織のアンティ・スレーヴァリー・インターナショナル（ASI）とインセックは五つの異なった郡で更なる調査をおこない、より多くを見出して、奴隷制によって冒されている諸グループを特定しようと試みた。この調査の最初の発見にもとづいて、両組織は、ネパールにおける奴隷的労働のとても広範な諸問題に、ネパール政府や国際援助機関の注目を集めるため、共同して働くことを決定した。

一小チームが必要とされる付加的調査をおこなうために設立された。これは、インセックから一人の調査者、ASIから一人の調査者から成った。ASIの調査者はヴォランティア機関の英国海外執行サーヴィス（BESO）によってインセックとともに作業することに支援を与えられた。

調査は奴隷的労働が発生していると信じられる四つの地理的エリアに限定された。極西開発地域の丘陵部、西部開発地域の丘陵部、西部テライおよび東部テライである。一九九五年九月から一九九六年二月までの六ヶ月にわたって、一一の異なった郡の総計三〇〇以上の農業労働者との集団ないし個人インタビューによって情報が集められた。これに加えて、地元の地主や他のエキスパ

ートまたNGOや官吏がインタビューされた。報告はまた四年間以上のインセックによる他の公開および未公開の調査も引用している。

この報告の焦点は、必然的に、男性の分野である奴隷的労働契約にあり、そして奴隷的労働家族内の女性の状態は詳しく研究されてはいない。それにもかかわらず、研究の過程で集められた情報から、女性の奴隷的労働者が特に搾取されたグループを構成することは明白であり、そして、これは将来における特別研究の主題であると勧告される。

（主要なエコロジカル地帯〔地図上で示される〕略）

本報告の構造

本報告の第一部はネパールにおける奴隷的労働の証拠を検討する。西部丘陵で蔓延するカーストに基づく奴隷的労働のシステムと、テライにおけるより大規模な地所で暴露されてきた奴隷的かつ強制的な労働の形態とに関する新たな証拠を紹介することからそれは始まる。つづいて、西部テライにおけるカマイヤの奴隷的労働システムについて収集された情報を要約する。これらすべての奴隷的労働システムにおいて女性や子供が直面する特殊な問題が論じられ、そして時々奴隷状態に導く農業労働の日雇い賃金システムを見て、このセクションは終わる。

報告の第二部は、奴隷的労働の根本原因と、そのシステムをうまく整えている権力構造とに集中する。まず、土地所有の現在のパターンについての歴史的展開、土地改革の試み、そして農村の負債の問題を検討する。それから、ネパールにおけるカースト制度の進化について詳細な描写がある。どのようにカーストにもとづく差別が依然として農村生活における一般要因であるのか、またどのように堅固なシステムが人口の相当部分を奴隷的な地位に置いておくように作動するのかが示される。

第三部は変化の見通しをみる。それはより広く南アジアの他の場所での奴隷的労働のパターンをみて、インド、パキスタン両国のケースとの数多くの類似性を記すことから始まる。それから、どのようにしてネパールのNGOが問題を提出し始めたのか、そのアプローチの成功をその限界のいくつかも含めて指摘する。

最後に、農業における奴隷的労働に取り組むために、これまでネパール政府がなしてきたことが提示される。第四部は、奴隷的かつ強制的労働を廃止するために、結論を引き出すとともに、ネパール政府、関心を持つ国際団体、寄付者機関、および地元NGO

〇に対して勧告をおこなう。

(1) Johnson, V. and Ivan-Smith, E., 1995. *Listening to Smaller Voices: Children in an Environment of Change*. Action Aid, London. 調査は、少女たちのなかには、じゅうたん工場での仕事の危険さや状態を十分知って、その仕事を家での状況よりも好ましいとみるものがあることを示した。

(2) 国連の奴隷制度、奴隷取引ならびに奴隷制類似の制度および慣行の廃止に関する補足条約（一九五六年）。

(3) Bista, D. B., 1967. *People of Nepal*, p.119, Ratna Pustak Bhandar, Kathmandu.

第一部 ネパールにおける奴隷的労働

（写真略、キャプション…耕作期には奴隷的労働者たちは二〇時間に達するまで、必要なら夜を徹して働く。）

第一章 ハリヤ・システム…西部丘陵における奴隷的労働

「ハリヤ」という語は、ネパール語で耕作を意味する「ハロ」という言葉に由来する。それゆえに厳密に言えば「ハリヤ」は「耕作する人」を意味するが、しかしそれは、自分自身のものとはちがう土地で働く農業労働者というより広い意味を持っていると理解される。

ネパールには多くのさまざまな農業労働システムがあるが、それはすべて「ハリヤ」という語でゆるやかに記される。賃金労働システムにすぎないものもあるが（第5章を見よ）、国際的定義のもとでは奴隷状態に等しいものもある。語にはさまざまな地域的ヴァリエーションがあり、丘陵でハリヤと呼ばれる者は、テライ（平野部）ではハリあるいはハルワと呼ばれるかもしれないが、意味上実際の違いはない。いくつかの極西諸郡では、ハリヤは、タルーの先住部族出自の債務奴隷的労働者の特徴づけるカマイヤ⁽¹⁾という言葉と互換性をもっている。

カーストの結果と封建的構造

土地を耕作する行為はもっぱら低カーストの職業であるとみられる。カースト法規を厳密に適用する場合、耕作するバラモンや

チェットリはそのハイカーストの地位を失う危険を冒しているのかもしれない。今日処罰は決して現実には実施されないが、しかし、にもかかわらず、ハイカーストの人々は一般的に耕作することを回避する。このことは特にカースト・システムが依然強力である極西および中西の丘陵部で真実である。しかし、ネパールの他の地域においても、耕作することは低い社会的地位を示すものとみられる。耕作を為すあのハイカーストの人々は、経済的必要性からのみそうするのだが、多くのものは、それが依然として恥の原因なので、そのことをオープンには認めない。同じ状況は、より「バラモン化された」エスニック集団の間にも見出されるが、かれらは自分自身の地位を上げようとして、ハイカーストの慣習を採用するのである。耕作を別のタイプの農業労働と異ならせ、そして農民が何故それを独自のものとして扱うかを説明するものは、このカースト要因なのだ。強力な習慣が、アンタッチャブル・カーストあるいは低地位のエスニック集団のみがハリヤとして土地を耕作することを要求するのである。

「ハリヤ」という言葉は、カーストにもとづくコミュニティ内の債務奴隷システムと非常に密接に関連しているが、それは西部丘陵で蔓延している。小あるいは中規模のハイカーストの農民は、耕作に従事して身を落とすとは思われないが、しかししばしば農業労働に市場の料金を支払うことができない。ディレンマは、債務奴隷制の利用によって低カースト労働者から支払われない労働を確保することで解決される。このことは特に、他の場合なら賃金労働が最も高価であろう農業カレンダーのピーク時には重要である。この取り決めは堅固なカースト・システムの産物であり、低カーストのハリヤは負債だけではなく慣習によっても働く義務がある。それは、ネパールが加盟国となっている国連の奴隷制度、奴隷取引ならびに奴隷制類似の制度および慣行の廃止に関する補足条約（一九五六年）に違反する。

インフォーマル・セクター・サーヴィス・センター（インセック）の収集した情報が示すところでは、このようなシステムはネパールの以下の郡に見出される。バイタディ、バジヤング、バジュラ、ダテルドゥラ、ダルチュラ、ダワラギリ、ゴルカ、グリミ、ムスタングおよびバルバト。他の証拠が示唆するところでは、問題は西部、中西部および極西部ネパールの丘陵地域の至る所に拡がっている。⁽²⁾

地主は一般的にハイカーストのバラモンあるいはチェットリ集団出身、またはグルンクやマガールのようなより高い地位のエスニック集団出身である。ハリヤは通常カミ（およびロハール）、ダマイやサルキのカーストのような、「アンタッチャブル」・カー

ストである。非常にまれではあるが、ハイカーストの人々もハリヤとして働いているかもしれない（ネパールのカースト・システムの全体的記述については、第七章を見よ）。

債務奴隸制

国連の奴隸制度、奴隸取引ならびに奴隸制類似の制度および慣行の廃止に関する補足条約（一九五六年）は、債務奴隸制度を次のように定義する。

負債の保証として、自らの個人的役務若しくはその者の支配下にある者の個人的役務に関する債務者の誓約から生じる地位又は状態であつて、合理的に評価したその役務の価値が債務の解除のために当てられないものまたはその役務の期間及び性質がそれぞれ限定されず、また、定義されていないもの

ハリヤがする仕事は債務の解除のために当てられていない。

ジャリ・ラム・ロハール（以下に引用）が生活するバイタデイ郡では、農業労働に関する地元の現行料金は一日四八ネパール・ルピー（〇・八五USD）である。もしジャリ・ラムがこの料分で支払われたなら、一年でかれはローンの元金と利息（月に五%）を払い戻すことができ、彼自身の食べ物（地主によって現在供給されている）に支払うことができるであろうし、これらの支払いをして、かれはなお、その家族を扶養するために六六〇〇ネパール・ルピー（一一九・〇〇USD）を残すであろう。そうする代わりに、かれは六年間働きつづけており、そしてかれの奴隸生活に終わりを見ることはできないのである。

ジャリ・ラム・ロハール

ジャリ・ラム・ロハールは三〇〇〇ネパール・ルピー（五四・〇〇USD）の負債で六年間ハリヤとして働いている。かれは極西地域のバイタデイ郡メラウリ村落開発委員会（VDC）のなかにある「アンタッチャブル」諸家屋の小村、コレウダに家族とともに生活している。妻と二人の息子および三人の娘があり、自分自身の家と〇・一ヘクタールよりも小さいキッチン・ガーデンを

持っている。かれがハリヤとして働いている地主はハイカーストで、二・五ヘクタールの農地を持っており、国家公務員として働いている。ジャリ・ラムは成人生活すべてを負債相手にごまかしごまかしごしてきたが、結局はハリヤとして仕事をするのを避けることができなかつた。かれは今もシステムから逃れる道を見出していない。

（写真省略、キャプション…ジャリ・ラム・ロハールは、かれが誰かわからないようにすることを条件にして、調査員たちに語ることに同意した。）

私は生きるために食べ物代に三〇〇ネパール・ルピー（五四・〇〇USドル）を借りた。家族を食わせるのは大問題なのだ。私はローンの利息を支払うためにだけ働いている。私がおつとお金を必要とするときには、地主のところに戻るのだ。ローンはいつでも増えつづけている。私が一体どのようにして完済するかは神が知るのだ。もし私が働かなければ、一月に5%の利息を支払わなければならぬのだ。

最も厳しい月はジェスタとアサール（五月、六月、七月）である。時々私は明け方から暗くなるまで働かなければならない。必要な場合には、深夜に作業を始めてずつづける。私は農場ですべての仕事をする。耕作、収穫、その他。一年のうち約八ヶ月は忙しいが、ポーターや品物を市場に持つていく（最も近い道まで一日歩く）というような他の仕事もするためにあちこちに行かねばならぬ。

私は普通一日に二回食事をとり、収穫時には一袋の穀物を得る（四〇—五〇キログラム、二〇〇ネパール・ルピーあるいは三・六〇USドル）。

私は貸金労働を求めて去ることができない、そうしないと地主は大騒ぎを起して言うだろう。「おまえは私に金を借りており、だから私のために働かなければならない。」通常は地主はよい人だ。かれは私を敬意をもって扱ってくれる。システムがとても不

公平なのだ。われわれはローンの故にまたわれわれのカーストの故にすべての側からの圧力のもとにあるのだ。⁽³⁾

かれの負債は変わっていない。ハリヤがこのシステムの中で負債によって束縛されていないと論じることは支持し得ないことだ。丘陵部における貧困や土地不足や隠された失業の故にハリヤが一日二回の食事を得るのはせめてもの幸運だ、という正統的議論がある。この議論を採用するひとびとは、自身をだますべきではない。実質上かれらはこうした人間が奴隷であるのは幸運だ、ということ論じているのである。

最近（一九九四年）ネパール・ラストラ銀行がおこなった農村のクレディット調査は、農村クレディットの一つの源が地主からのものであることを明らかにした。

地主の金の貸手としての役割はインプットおよびアウトプットのマーケットと相互に関係している。地主の基本的利害が土地の耕作にあるのだから、貸し出しは利息を稼ぐほうに向かわない。その利害はむしろ労働供給の規則的保証にある。この理由でそのローンは利息なしである。しかしこのようなローンの利息は減じられた労働価格を通じて間接的に稼がれるのである。

地主からの借金の型で最も広く行われているのは奴隷的労働の型である。⁽⁴⁾ここで述べられたことはASIやインセックの調査によつて裏づけされているけれども、それは話の半分には過ぎない。ローンを「利息なし」と呼ぶことは人を誤解させる。もしハリヤが必要とされるときに仕事にかかることができないう場合、月六%まで何事にも懲罰的利息を課される。このようなものとして、ローンはまさにハリヤを地主に束縛するために与えられるのである。更に言えば、「労働価格」はたった一日に一ないし二回の食事の支給にまで一般に減価されている。

ハリヤは時々たった数千ルピーの負債のために働く。実際、この負債の利息を支払うために、労働にたいする地元日雇い賃金をなしですませている。バディタイ郡の三つのVDCの一九九人のハリヤの調査（インセックおよびASIによつておこなわれた）にもとづくと、負債の利息支払いの代わりに食べ物だけで働くことを受け入れて地元日雇い賃金をなしですますことによつて、ハ

リヤは実質上月に一〇%を超える率で利息を支払っていると計算することが可能なのである。⁽⁵⁾

ハリヤがやる仕事は時間によって制限されないし、彼らの義務は定義されない。負債は父から息子に受け継がれ、それとともにハリヤとして働く責任が受け継がれる。たとえ地主が変わるとしても、四世代まで同じ負債で束縛される家族もいる。バイタディ郡ラダナ・バサディVDC出身のダミ・ラム・ロハールはこの勘定にいかなる幻想ももっていない。

システムから抜ける方法はない。息絶えるまで働きつづけなければならぬ。それが唯一の出口なのだ。他のただひとつの出口は、あなた自身の息子をあなたの代わりにハリヤにならせることだ。

私は私の子供がハリヤとして働かないことを望んでいる。私は一所懸命働いてかれらが教育あるものになるのを見たい。しかし、毎年わたしは「今年は抜け出るぞ」と言い、そして毎年留まったまま終わるのだ。⁽⁶⁾

仕事は少年期から成人生活のすべてを通じて、ハリヤがもはや激しい労働ができなくなるまでつづき、そしてその責任を息子たちに回す。ASIとインセックの調査によれば、ローンの額は二〇〇ネパール・ルピー（三・六〇USD）から五〇〇〇ネパール・ルピー（九〇〇・〇〇USD）にわたり、ローンは不特定期間でなされる。実際、返済は期待されるどころか、積極的に思いとどまらせられる。ハリヤは一度で総額を返却しなければならぬ。さもなければ地主は受け取らない。彼らの稼ぎはとても乏しいので、このようなやり方でローンを返すのは通常まったく不可能なのである。ハリヤが通常脱出できる唯一の方法は、かれが持っている土地や所有物をなんであれ売り払い（それらが抵当に入っていないならば）、こうしてかれの家族をホームレスにすることによってである。パルバト郡、サランタールVDCのラム・マニ（二二歳）はこの絶望的なコースをとった。

ローンは増加し、いつも私はこのような圧力のもとにあった。私は自分の土地（〇・〇二ヘクタール）を売った。私には妻と小さな子供がおり、現在われわれは政府の土地に無断でいつか、小屋に住んでいる。ハイカーストのなかにはわたしを追い出そうとするものもいる。⁽⁷⁾

むしろローンを支払うよりもつとせば、ハリヤは食べ物や衣類を買うために、地主からさらなるクレジットを要請するであろう。しかしながらもしさらなるクレジットが利用できない場合には、ハリヤはかれの地主を変えようと試みることができ、このことは別の地主からより多額のローンを得て旧地主に支払われることによってなされる。ハリヤが長く働けば働くほど、債務はより大きくなる傾向がある。

ハリヤの仕事が時間によって制限されないというのと同じやり方で、かれらの義務も限定されない。地主の農場に残された農作業がほとんどない時には、地主はハリヤを親戚のために働くように「貸す」かもしれないし、あるいは、ポーターの仕事や地元のマーケット・タウンを行き来して生産物を運ぶためにハリヤを利用しつづけるかもしれない。ハリヤが働かなければならない時間の長さ、その期間あるいは義務を示す契約は聞いたことがないし、負債が公式に記録されることはめつたにない。

季節作業と「準・奴隷的労働」

西部丘陵では地主は通常大農場をもたない。いまでも若干の大地主がいるけれども、このエリアの平均的農場規模は〇・八ヘクタールである。⁽⁸⁾

ほとんど農作業がないオフシーズンには、ハリヤは必要とされないし、日々の食物を与えられない。かれらは生きるために見つけることのできるほかの仕事をなす必要を探さなければならず、男の多くはインドあるいはより大きな市に移住する。しかしながら、かれらは負債と慣習によって地主が必要とするときに帰って来ざるを得ない。季節的な仕事の性質が、ある者をしてこのタイプのハリヤ・システムを「準・奴隷的労働」と呼ぶようにしているのである。この語法は不満足であるし、国際的な法的定義に基盤をもつものではない。ハリヤは常に地主の支配下にあるのであって、かれは負債を通じて拘束されているのである。単に、ハリヤがなす仕事のないときにかれを食わせるよりも、むしろこの期間彼自身の資源で生活するようにかれを解き放つのがより利益があることを地主がわかっているということなのである。かれはハリヤが必要なきに帰ってこざるを得ないことをはっきり知っておりしているのである。ハリヤは移住を認められて、インドの大都市から金持ちになって帰ってくる事ができる、という想定もある。しかし、移住労働からの稼ぎは重要だけれども、多くの場合家計への正味の貢献は些細なもので、バイタディ郡のラダナ・

バサティVDC出身のハリヤであるタミ・ラム・ロハールが説明しているがごときものである。

われわれの家族には四人の兄弟がいる。われわれはみんな年の四ヶ月はインドに働きに行き、そして一緒に約六〇〇〇インド・ルピー（一七〇・〇〇USドル）を持って帰る。しかし、旅行しそこに住むのにも費用がかかるし、残りの家族（他の一人のメンバー）はわれわれが行っている間生きるためにローンを受けなければならぬ。われわれがローンと利息とその他なにやかやを返済する時までに、残るものは何も無い。何故行くのかって？うむ、ここで仕事が無いときには、少なくとも食べる口がひとつ少なくなるね。⁽⁹⁾

あるものにとって、ハリヤの移住は非実用的なものとされる。なぜなら、かれらは年の一〇ヶ月まで雇主のために留まって働かなければならないからである。

地主—ハリヤ関係

通常ハリヤと地主との関係はハイカーストとローカーストのグループの間の関係のようなものである。地主のなかにはかれらのハリヤに対して品のない言葉を使ったり、時々暴力を行使すると脅かすものもある。まれにはそれが行使される。セラナVDCのカジェンドラ・ラム・ロハールは三〇〇〇ネパール・ルピー（五四・〇〇USドル）の負債のためにハリヤとして八年間働いている。

イネの移植の時だった。わたしは来る日も来る日も泥と水のなかで夕方になるまで働いていた。脚と足が水のためにとても痛くなりはれ上がった。もはやわたしは水に近づくことができなかった。そんな時ある夕方地主が行って流れの中で雄牛を洗うようにわたしに命じた。わたしはかれに脚を見せて苦痛なので再び水に近づくことができな、と言った。行くのを断ったのでかれはわたしを打擲した。他の何人かの人びとが割って入り結局彼を止めた。雄牛を洗わなかったが、翌朝わたしは再び畑に戻り、それ以上なにも言われなかった。⁽¹⁰⁾

ハリヤが病気になったなら、かれらは病気の間、代わりを送るようには要求される。通常これは家族の別の男のメンバーである。もしだれも使用できないとき、かれらはいなかった日々の利息を課され、日割りの食物配給量を受け取らない。調査の過程でインタヴェューされたハリヤのなかには、怪我をしたとき保健所に行くのに、夕方に時間を休むのを認められているものもいた。

ハリヤ・システムのヴァリエーション

郡ごとに少しずつ異なったシステムをもっている。いくつかの村々ではハリヤは一日二回の食事を得るが、別の村々では全然得ないかもしれない。時々古い衣類がハリヤに供給されるし、また時々かれらは収穫の終わりに穀物の袋を与えられるかもしれない。インセックとASIがおこなった調査では、サンプルの九・四%が地主に現実の負債を持っていなかったが、日割りの食物配給量を得るためにだけ地主に束縛されていた。多様な報酬の率はさておいて、より基本的な相違が見出される。ハリヤが耕作シーズンだけ、すなわち年のうちまさに四ヶ月を束縛されるエリアもあれば、ハリヤが年間を通じて仕事に使用できるという条件でローンを与えられる村々もある。かれらは四ヶ月の耕作シーズンの間働くが、その間かれらは日割りの食事だけを受け取る。その後、かれらが働く日々に対して地元の日割り賃金率で支払われるのである。これらの賃金からハリヤは月に5%でローンの利息を支払うと期待されるのである。

農場の規模が特に小さいところでは、幾人かの地主が一緒になってクラブをつくり、かれらの間でハリヤを共有するかもしれない。しかしながら大きな土地所有者はハリヤに小片の土地を与えることによって、かれらに支払うことを選ぶかもしれない。これらのヴァリエーションのいくつかは奴隷的労働として出発していないかもしれないが、たいていの場合、ハリヤは負債を完済することができず、そして多かれ少なかれシステムが上に概説した古典的な形態の債務奴隷制に道を譲るのは明らかである。

西部丘陵におけるハリヤ・システムのさまざまな形態が実際にはまさにカーストにもとづく債務奴隷の共通のシステムのヴァリエーションであることは明らかである。次章では平野部における状況を見ることになるが、そこではハリヤは農奴制にもとづくシステムのなかで奴隷化されているのである。

- (1) 第六章を参照。
- (2) INSEC, 1994. *Human Rights Year Book 1993*, INSEC, Kathmandu, Chapter 8.
- (3) 一九九六年一月に ASI・INSEC が行った調査から。
- (4) Nepal Rastra Bank, 1994. *Nepal Rural Credit Review, Final Report*, p84, Kathmandu.
- (5) ネパールにおける農業労働者の最低賃金の研究は、一九九五年秋、労働省、経済・技術研究センターおよび国際労働機関によっておこなわれた。
- (6) 一九九五年一二月に ASI・INSEC が行った調査から。
- (7) 同上。
- (8) Central Bureau of Statistics, 1994. *National Sample Census of Agriculture Nepal 1991/92: Analysis of Results*, His Majesty's Government National Planning Commission Secretariat, Kathmandu.
- (9) 一九九五年一〇月に ASI・INSEC が行った調査から。
- (10) 同上。

第二章 平野部における債務奴隷制

東部ネパール、サプタリ郡のインドとの国境近くにカイラディという地主の村がある。それはサプタ・コシ川が水を与える最も重要な農地の数千ヘクタールのなかに位置している。村それ自体は葉の生い茂った竹の空き地の背後に隠れている。テレビアンテナや衛星放送受信機が椰子の間に見える。村の周りをまわると、一連のゆりの池と小さな湖とのまわりに建てられた広々としたコンクリートとレンガの諸別荘が見える。これらはネパールで最大の最富裕な約一〇〇人の地主の家である。あるものはここおよび他の郡で一四〇〇ヘクタール以上の保有地を支配すると報告されている。

ムサーリ村は、野原を横切って歩いてわずか五分のところだが、まったく対照的である。それはカイラディの地主のひとりがある土地に建てられたムサールの人びとの居留地である。交差した木切れと小枝で作られた三六のとても質素な小屋の集まりで、全部で三〇〇の個人が住んでいる。ラム・デヴ・サダルは五四歳でかれの祖父の時代からここに住んでいる。

かれ(地主)はわれわれに家の土地をくれており、それでわれわれはかれのために働くことができる。われわれの仕事は溝を掘ることである。それでわれわれはある場所から別のところに泥を運んで田畑を作る(米栽培のために水路と台地を構築する)。ひとりの男が100モン(4トン)の泥をまあ20メートル動かすのに終日かかる。それがわれわれの主な仕事だが、他のすべての種類の農作業、耕したり収穫したりその他のこともやる。それで年の六ヶ月は忙しい。われわれは働くときには朝食を得、米で支払われる日給(100—200ネパール・ルピーすなわち0・18—0・22USドル)を得る。

村の子供たちは裸ではだして走っている。かれらを取り巻く農地は豊かであるにもかかわらず、かれらの栄養状態は悪く栄養失調である。だれも学校へは行かず、多くは牛を見張る仕事をし、お返しに食食用の米をいくらか受け取る。ムサルは地域ではローカーストの最下層とみなされ、「アンタッチャブル」の地位を持っている(第七章を見よ)。かれらはまたカタウエというカースト名でも知られている。伝統的にこのカーストは「溝堀と他の農作業に雇われて」いる。⁽¹⁾かれらのカーストによって指定された課題とはちがった仕事をかれらが見つけるのは不可能である。かれらはハイカーストの地主の家に近づくのを認められない。

昇給?かれらはわれわれの昇給なんてやらないだろう。もし昇給を求めればかれらは二度と仕事をくれないだろう。かれらはわれわれに引越ししなければならぬと言っだろう。なんとかやっていくというのはとてもむずかしいんだ。村には食べる口をかかえた大家族がたくさんいる。ローンをもとめていっても得られないだろう。われわれは外で仕事を得て生きるんだ。もっと若い連中はパンジャブ(インド)の砂糖きびプランテーションで働くために出ていかなければならぬ。⁽²⁾

農奴制

農奴制と言うとヨーロッパ中世あるいは一九世紀ロシアと関連した古風な概念のようである。しかしながらそれはネパールでは近代的現実なのだ。国連の奴隷制度、奴隷取引ならびに奴隷制類似の制度および慣行の廃止に関する補足条約(一九五六年)は、農奴制をつぎのように定義している。

法律、慣習または協定により他の者に属する土地で生活しおよび労働し、かつ、一定の定められた役務を、報酬の有無にかかわらず、当該他の者に提供することを義務づけられ、かつその地位を自由に変更できない小作人の状態又は地位

平野では、大土地所有者は利益を最大限にするために多量の安価で従属的な農業労働を必要とする。農場規模は一般に丘陵より大きく、土地所有者はその地所にひとつまたはそれ以上のローカーストの居留地を持っているかもしれない。時々これらの居留地はわずか五あるいは六世帯になるかもしれないが、しかしより大きい地所では、村全体が地主によって効果的に所有されるかもしれない。ローカーストの家族は市場料金の断片で地主に労働を提供することを余儀なくされる。さもなければ、かれらは立ち退きの危険を冒すことになるのである。かれらに地主のため働くよう強制するのはこれなのだ。労働強制は女性や子供を含むすべての家族メンバーに拡大するかもしれないし、若干の伝統的役割のために村民がまったく支払われないで役務を与えることを要求されるかもしれない。

このシステムで働くハリヤは農奴である。かれらのハリヤとしての役割はかれらのカースト、かれらが変えることのできない地位、によって決定される。かれらのカーストはかれらが農業労働をおこなうよう要求する。他の雇用形態はかれらに開かれていないのである。かれらは日々の食糧と住処のため地主に従属している。村の若者たちはなすべき農作業がほとんどないとき移住できるけれども、かれらは扶養家族を後に残し、そして必要とされるときに帰ることを慣習によって強制される。この慣習を破ることは、地主がかれの所有地から家族を追い立てかれらを家なしにし困窮させることを意味する。このようにして、その役務を放置しておくことは実際には不可能なのであり、かれらはどんな条件が課されようとも受け入れることを強制されるのである。

住むところ

村が建てられている土地は地主が所有しているので、村人は絶えず追い立てを恐怖している。家を建てるためにハリヤに与えられた土地は通常非常に小さい。かれらはずぎはぎだらけのわらぶき屋根と泥の漆喰を塗りつけられた枝編み細工の壁をもつ初步的な住処に住むが、それを自分で建て修理するのである。たとえかれらが住居を自分で建て修理するとしても、それは自分自身のも

のではない。地主は土地に対する権利を持っているので、その土地になにが建てられようとかれはそれにたいする権利を持っているのである。これは、ハリヤがその小屋の隣の土地の使われない部分に育てた生産物にまで拡大する。東部地域のサブタリ郡出のあるハリヤは、数年越しにどのようにしてかれの掘った小屋の隣の場所に植えたオレンジの木を育てるのにはほとんどない自由時間を費やしたかを語った。しかしながら、いったん木が成長し果物を付けはじめると、地主が踏み込んできて果物と木をかれ自身のものだと主張したのである。⁽³⁾

もうひとつの形態の奴隷制

しばしば平野のハリヤも丘陵部でこれに相当する存在と同様に、地主からローンを借り束縛されるようになる。異なった形態の債務奴隷制が支配的になるのもっとしばしばのことである。ここでは労働者は年の終わりにのみ支払われる。このことが食糧代を支払うために地主からローンを借りることをかれらに強制するのである。これらのローンの利息を支払うことを余儀なくされるかどうかは地主次第である。例外なく、負債を返すまで、かれらは地主の役務を放置しておくことは許されない。最終的に支払日が年の終わりに到着するときに、かれらはサラリーの大部分が負債を完済するために消失してしまったことがわかり、そして次の年のサイクルが始まる。ハリヤをこのシステムのワナに落として、地主は賃金率を押し下げることができる。この調査の過程でインタビューを受けたハリヤは、他のどのようなシステムについても知らない、と言って、この体制をかれらの運命として受け入れた。S・S（匿名の希望者）は、ウダヤプル、トキシラVDCの地主であり、かれの土地に若干のハリヤの家族を持っている。かれは訪問調査員と話すために、村のハリヤを何人か一緒に呼ぶ。かれは説明する。

かれらは農作業をし、そして一年中留まっているが、もし望めば去るのは自由である。かれらはその代わりに一日に三度の食事と、収穫後に現物で二袋の米（約二〇〇〇ネパール・ルピー）すなわち三六・〇〇USD（約一〇〇〇ネパール・ルピー）を得る。それからかれらは一月の給料七〇〇ネパール・ルピー（三・〇〇USD）を得る。かれらは病氣休暇をとり、約一〇〇〇ネパール・ルピー（八・〇〇USD）まで医療施設を使うがしかし、もちろんそれは地主次第である。このあたりの地主のなかには、病氣休暇を与えず、賃金から失われた日々を引き去るものもある。

クマル・B・ダジは二〇歳でS・Sの隣人のものである土地にハリヤとして住んでいる。

わたしは四歳の時に働き始めた。父は仕立て屋であったが死んだ。それから母は出て行き、われわれは生きるために働かねばならなかった。わたしは一年中働く。朝早く(六時に)働き始め、夕方(六時に)終えるが、しかし午後(あまりに暑くて働けない時に)二時間休む。わたしは毎年二袋の米(二〇〇〇ネパール・ルピーまたは三六・〇〇USD)と一日に三度の食べ物と月に二〇〇ネパール・ルピー(三・六〇USD)を獲得する。いやいや、食いつなぐには十分ではない。家族の残りのものは賃金労働に行く。かれらはずっと支払ってもらおう。

クマルの賃金は、地域の普通の農業労働者の約五分の一である。なお悪いことに、かれは年の終わりにのみ支払われる。S・Sはこれはシステムだということを確認した。

賃金は毎年支払われる。しかし、もしかれらが金を必要とするなら地主は利息のつかない前貸し金を与える。それは実際にはローンではない。幾人かの経験のないハリヤがより小額の賃金しか得ないというのは真実ではない……いや、そのとおりだ。かれらは前貸しを返すまでは自由に去ることができない。⁽⁴⁾

家内奴隷制

ハリヤのなかには全然家用の土地を与えられないものもある。その代わりに馬小屋のなかで、あるいは地主の家の軒下で眠るのである。典型的に言うと、かれらは野外作業とともに家内作業をすることを要求され、ハリヤ・ノカー(召使い)として知られている。この状況では、地主は、どこで眠るのか、何を食べるかを含めて、かれらの生活のあらゆる局面をほとんど支配する。家内の召使いとしてかれらは一日二四時間待機しているのだ。こうした増加する仕事の重荷にもかかわらず、かれらが受け取るのはと

でも低い報酬である。ラム・デヴ・パスワンの例が示すように、ハリヤ・ノカーは、調査の過程で遭遇した最も搾取されたグループのひとつを代表する。

ハイカーストのカイラディの村には約一〇〇の地主の家があり、おのおのが少なくともラム・デヴのような人間をひとり雇っているだろう。若干名を雇っているものもあるだろう。かれらの多くは七つか八つの子供たちである。地主の土地に住み、負債に縛られ、「アンタッチャブル」で、家内の役務および農作業に使用されて、このようなハリヤは多くのさまざまな面から圧迫を受けている。彼らにたいする地主の支配は完璧である。

ハリヤ・ノカーという現象は国内の多くの地域で一般的である。インセックは、「金持ちが貧しい労働者を農夫あるいは牛飼として、多かれ少なかれ奴隷として、働くように家で飼う」慣行があり、それはネパール七五郡のうち二〇で生じていることを報告した。⁽⁵⁾

このシステムでは、ハリヤの稼ぎは非常に低いのでかれらは扶養家族を食べさせることができないうであろう。これは結果として食事を得るために家族全体が仕事で助けるといふことをともしばしば生じさせる。子供たちは牛番をするであろうし、女たちは家内仕事や他の雑用の全般を要求があり次第遂行することを求められるかもしれない。

ラム・デヴ・パスワン (写真略)

ラム・デヴ・パスワンは、自分の正確な年齢を知らないが、20歳前半である。かれの出は、サプタリ郡カイラディVDCのチャンティ・ガウと呼ばれるローカーストで土地のない人びとの小さな村である。最近かれは結婚したが子供はまだである。

わたしは一〇年間ハリヤ・ノカーである。わたしの父もそうだ。われわれは同じ地主、ラジャ・バブのために働いている。かれはこの村の所有者だ。父は今家にいる一牛にえきをやってる。

ラジャ・バブは、*ハ*、*ハ*や他の郡で約二〇〇ヘクタールの大所有地を持つ地主、ラマナンタ・プラサド・シンに敬意を表する仲

である。かれはカイラティ村に大きな家を持っている。

わたしは農作業もやるし家内作業もやる。わたしは食事をとるために村にもどるが、残りの時間は大きな家に留まる。毎朝四時に起きて、正午頃まで働く。それからこの村へ食べに戻ってくる。あるいてたった一五分だ。なすべきことにもよるが、昼食に一時間かそこいらかける。それから家に帰るかあるいは田畑で他の任務を遂行する。夕方に灌漑ポンプを世話して八時まで働きに働く。それから別の食事を得る。

わたしは月に五〇キログラムの（皮のない）米（二〇〇ネパール・ルピーあるいは三・六〇USDル）を得、毎年二セットの古着を得る。いかなる他の食べ物も得ない。われわれはダル（レンズ豆）を買うためにいくらかの米を売る。そして田畑から他の野菜を拾い集める。食いつなぐのに十分ではないが。

父が最初にローンを借りた。それがこのようにわれわれが働いている理由だ。わたしも同様にローンを借りなければならなかった。わたしはニモン（八〇キログラム）の米（三三〇ネパール・ルピーあるいは六・〇〇USDル）と現金で四〇〇〇ネパール・ルピー（七二・〇〇USDル）を借りている。わたしは毎年利息に二〇キログラムの米と、それにローンの利息四〇〇ネパール・ルピー（七・二〇USDル）を支払わねばならない。利息はわたしの賃金から引かれるが、通常わたしは支払うことができず更に多く借りなければならぬ。利息は負債に加えられる。わたしは負債のゆえに働きつづけなければならぬ。これは誰か他の人の下で生きる人生ではない。もし病気になるれば失う日々のために支払いをしなければならぬ。しかし適切な仕事をもった人びとはそうする必要がないだろう。かれらは病気休暇をとる。どのようにしてわたしはこの負債を完済するのだろうか。わたしはいつももっているし、子供たちももつだろう。⁽⁶⁾

(一) Bista, D. B., 1967. p. 113. op. cit.

- (2) 一九九六年一月にASI・INSECがおこなった調査から。
- (3) 同上。
- (4) 同上。
- (5) INSEC, 1994. op. cit. Chapter 8.
- (6) 一九九六年一月にASI・INSECがおこなった調査から。

第三章 カマイヤ・システム

われわれは債務のためにカマイヤおよびアクリイとして働いている。自分自身の土地を持たず、地主のために働くことよって生きている。もし一日の作業を失えば債務が増加する。わたしには病気の子供がいる。なにをすべきなのか？働きに行くのか、さもなければ留まって子供の世話をするのか？わたしには泥まみれの着物を洗濯する時間さえもない。われわれは人間だし、病気のときには休みの時間をもつべきである。

ルマリ・タルニ、中西部ネパール、バルティヤ郡の女性の奴隷的労働者である。⁽¹⁾

カマイヤという語は多くの意味においてハリヤという語と同義語であり、前の諸章で記述した搾取のパターンと多くの類似性を分有している。しかしながら、三つの重要な理由でカマイヤ・システムを独自に考えることが必要である。第一にそれはまったく異なった起源から発しており、もともとは西部テライのタルーの人びとの部族的文化から来ていて、したがってそれ自体の用語法とヴァリエーションをもっている。

第二に、ネパールの奴隷的労働のすべてのシステムのなかでそれは最も知られており、最もよく調査されていて、政府やNGOが直接に言及している唯一のものである。したがって利用しうるずっとよい情報がある。第三に、それは、ヴェールで覆われた奴隷取引の形態で、地主による奴隷的労働者の実質的売買を認める唯一のシステムである。

タルー族

カマイヤ・システムは一九六〇年代に西部テライのタルーの人びとを研究している人類学者たちによって、最初に書きとめられた。⁽²⁾

それまでになされた大抵の調査は西部ネパールの五郡、カンチャンプル、カイラリ、バルディヤ、バンケ、ダングに集中していた。カマイヤ・システムはしかしながら、スルケト、ネワルパルシ、ルペンデヒそれにカピルヴァツの諸郡においても存在することが知られている。システムは奴隷的労働および農奴制によって特徴づけられ、一〇万人を超える個人に影響を与えていると考えられる。これら影響をこうむっている九五％はタルーである。

一一九万四二二四人（ネパール人口の六・五％）の人口で、タルー族は国で最大のエスニック・グループのひとつである。かれらは、東から西へ二二郡を横切り、依然として巨大な多数派を占めるテライ地域の先住民である。かれらは西部テライで特に多数である。六歳以上（子供たちが学校に行き始める時期）のタルーの七九％は一度も学校に出ない。⁽³⁾

歴史的には、タルー族は外部のものによって畏れられていた。かれらの住む土地はマリアアがはびこっており、タルー族はそれに対してなにか自然的抵抗力を獲得した、と言われていたのである。その結果、かれらは何世紀の間、比較的孤立したなかで発展するままであった。かれらが隣接するコミュニティと直接的接触に入るようになったのは、わずかにここ一〇〇年のことである。タルー族にとってこの接触は悲惨な結果をもたらした。

もともとタルー族の伝統的な土地は北部インドへと伸びていたが、一九世紀にかれらの住んでいた森は急速に南部から消えていった。レールの枕木用に材木を英国統治に供給したからである。同じ時期、ネパールではシャハの支配者たちや後にはラナ家がデイレンマに直面していた。一方では、かれらはマリアアのジャングルを彼ら自身と拡張主義的な隣人との間の有益な南方のバリアーと見たが、他方ではかれらはその税金基盤を拡大することが必要だった。これらの理由のために直接的植民地主義は準軍事的居留地に限定された。一方、地元のタルー族の首長は王権のため税金を集める権限を与えられた。⁽⁴⁾

間接的収税システムは、しかしながら徐々に変化し、そして徴税吏は、宮廷にコネを持った丘陵出のハイカーストのネパール語を話す人々からますます抜き出された。こうした徴税吏はジャミンダールと呼ばれた。

これに加えて、国王はテライの広大な土地を、気に入りの廷臣や将軍に対し報酬としてくれてやった。王権への忠誠を確保する

ためである。こうして与えられた土地は、ビルタ地と呼ばれ、受納者はビルタワラと呼ばれた（第六章を見よ）。かれらは、土地を耕すタルーの人びとから税金を集める権力を持ち、そしてお返しに王権に年貢を納めた。

新しい行政官はかれらの財産を監督し、税金を集めるためにほんの時折やってくるものだった。かれらの滞在する期間は最も長く、乾季の二ないし三ヶ月というものだった。マラリアの危険を最小限にするためだった。

ジャミンダールの導入とビルタ地の授与は、テライの農作地域の拡大と、タルーの伝統的な森林地の激減をみた。皮肉なことに、マラリアへの抵抗力の故に、この土地をきれいにしより広い栽培を可能にするために労働力として用いられたのは、増加していく土地なしのタルーであった。こうして、タルー族は彼ら自身の破滅の道具となった。二〇世紀のはじめまでに、タルーの人びとが最終的に公民権を奪われるようになる型が確立されていた。しかし、一九六〇年代にマラリア絶滅プログラムが導入されてはじめて、地域は丘陵からの大量移住に開放された。

丘陵出の有力な土地持ち家族は、新しく開かれた森で保有地を増やすことができて、さらに先住のタルーを辺境化することになった。少数のタルーは自分自身が地主となり、多数派のハイカースト社会のやり方を採用したが、大多数のタルーはやられやすい位置に残され、搾取の機が熟すところとなった。

カマイヤ・システムの進展

カマイヤ・システムが、もともと非移動性農業の危険に対して保険をかけるのを助けるための、タルー族の使った生き残り戦略から発展したということを示唆する証拠がある。⁽⁵⁾ その起源が何であれ、新たな地主がそのシステムを、すばやく高度に搾取的なものに転換したのだ。そこでは、大土地所有者が、かれらが雄牛やあるいは他の農業家畜類を飼うのと同じやり方でかれらの土地を耕すためにカマイヤを飼うのだ。

タラ・プラサド・タルーはナンバスタVDCの地主であり、大きなレンガ作りの総合施設に拡大家族とともに住むが、それは村の中心点にある。その周りには牝牛や雄牛の小屋や一群のカマイヤの掘っ立て小屋がある。家自体の内部では、ブクライ（女性のカマイヤ）が水を運び昨夜の食事の皿を洗っている。タラ・プラサドは四〇ピガの土地（二七・二ヘクター）を持ち、七組のカ

マイヤとブクライがそれを耕している。(写真略)

われわれは土地を耕すためにカマイヤを飼っている。それが正しいのか間違っているのか、あるいはなんなのかは知らない。われわれは土地を持っておりカマイヤが必要なのだ。かく簡単なことなのだ。別の耕作システムはないのだ。もしかれらに金をやれば、すぐにかれらはアルコールに費やすだろう。かれらは金の使い方を知らないのだ。

かれらは収穫作業やすべての田畑の作業をやる。ちよと今はかれらは田畑で働くのに大変忙しい。しかし、夜に働く—四時に働き始めるというのには本当ではない。わたしはただカップルを雇っているだけだ。カマイヤであるならばかれらは減らされた分け前を得る。以前は、人びとは少なく土地は多かったのだ、カマイヤは多かれ少なかれ一日に二四時間働かねばならなかった。今はそんなに激しく働かなくてもよい。⁽⁶⁾

一九九五年政府委員会は、カンチャンプル、カイラリ、バルデイヤ、バンケそれにダングの五郡で約一万七〇〇〇のカマイヤ家族を特定した。⁽⁷⁾このうち約五〇%が債務奴隷身分で働いていたが、これは、国連の奴隷制度、奴隷取引ならびに奴隷制類似の制度および慣行の廃止に関する補足条約によって禁止されている。

その上、カマイヤ家族の五八%が家用の自分自身の土地を持っていないことが見出された。それゆえかれらはその頭を蓋う屋根のために地主に従属していた。カマイヤ・システムの主な要素は以前の諸章で記述した他の諸形態の奴隷制の要素に類似している。カマイヤは通常現物で支払われ、そして通常債務によって雇主に束縛されている。しかしながら主要な相違は、かれらは一年を通してその土地に留まることを余儀なくされている、ということである。この趣旨の口頭契約は、伝統的に毎年一月中旬のマギの祭りのときに地主となされる。

カマイヤは通常収穫後に米で支払いをされる。この支払いはピガとして知られている。付け加えるに、かれらは一定の他の穀物、塩および油を与えられ、米を補うためのものを一塊で再び手渡される。全部の額は生存にちよとどか、あるいは時々僅かに足らな

いかであると測定される。

カマイヤに対する支配は、かれらを債務の永続的サイクルのなかに閉じ込めることによって維持される。債務は薬や追加の食べ物や他の必需品の支払いのために増える。地主はしばしば、なおその上に債務をふくらまし、病気でかれらが働かなかつた日の仕事を請求する。同様に、カマイヤが責任を負うと見られるひとつの備品あるいは一匹の家畜になんらかの損害があると、しばしばカマイヤが知らないうちに、債務に付け加えられる。債務を完済しようとするカマイヤは、経費の長いリストとらせん状の利息を提示され、そのため事実上金を完済することがとても困難であると、予期することができると。このようにして債務の持ち主は人間の持ちもの、カマイヤ、になるのだ。

ハリヤ・システムとカマイヤ・システムの基本的な相違は、後者がひとりの人間の別の人間による売買を認めるということである。各カマイヤに付属する債務がかれをその地主にくくりつけるだけではなくて、事実上かれにネパール・ルピーでの現金価値を与えるのである。カマイヤはこうして地主が他人に売ることのできる有形の資産をあらわす。こうした売買は、伝統的なマグ（一月）の時期に、しばしば地主間でおこなわれる。うわべは売買されるのは債務だけでも、それはカマイヤに対する所有の権力をもたらず。こうして、債務は事実上奴隷取引の形態であるもののためたんなるヴェールとなる。ときどきブローカーはカマイヤと土地所有者の間の仲介者として行動する。カンチャンプルのある地主によると…。

仲介者がたくきんいて、そのまきはタルーである。かれらは、かれらとともに座って、かれらにアルコールを与え、友だちのふりをする。しかしかれらが債務に深くはまり込んでいるとき、ブローカーたちは債務を地主に売る。そしてそれが、かれらがカマイヤになる仕方なのだ。⁽⁸⁾

マニ・ラム・チョーダリーは二五歳で、ひとりの娘と結婚している。かれは、もともと父の死後いところによって売られた。(写真略)

わたしは現在ここで二年間働いているが、カマイヤとして働き始めたのは一年前である。もともとわたしはカイラリ郡のタンガティからやって来た。父はタンガティで土地を持っていた。しかし父が死んだときわたしは若く、いところがすべての土地をかれの名義に移して、かれはわたしを放り出した。

いとはわたしを五〇〇ネパール・ルピー(九・〇〇USドル)でカマイヤとして売った。ローンはそこからはじまる。わたしは食べ物と古着とそして一年に二キントル(二〇〇キログラム)の穀物を得た。とても悪くて厳しい仕事だった。以前のように自由ではせんせんなかった。それからわたしはもうひとりの地主へ移った。かれは弁護士だった。いところがやって来てわたしに話さないで、わたしの名前でかれからローンを借りた。いところが死んだときわたしは七〇〇ネパール・ルピー(二二六・〇USドル)の債務を持っていることがわずかに判明した。今債務は一万四〇〇〇ネパール・ルピー(二五二・〇〇USドル)だ。⁽⁹⁾

ひとつのシステムか多くのシステムか？

カマイヤ・システムには多くのヴァリエーションがあり、搾取のスペクトル全体を示している。労働者が債務をもっているかどうか、またカマイヤが自分自身の家を持っているか、あるいはそれが建てられる一片の土地をもっているか、によって相違がある。支払われる報酬の額やタイプにも、郡によりまた地主によってかなりの相違がある。

最も搾取的なケースは、カマイヤが負債を負い、また自分の土地も持っていない場合に生じる。このような状況で、かれは地主の財産で生活するのを余儀なくされる。最近の政府調査によれば、西部ネパール五郡の約二万四〇〇〇の個々の家族メンバーが、このような状況にある。⁽¹⁰⁾

カマイヤが自身の土地を持っていないとき、地主は通常農場住宅の隣にある、その上に掘っ立て小屋を建てる小さな場所を割り当てる。地主の家を囲む納屋や馬小屋に加えて、大きな所有地の上にカマイヤの掘っ立て小屋の集合が一定して並んでいる。カマイヤは食べ物、クレディットそして住処に関して地主に全面的に従属している。もしカマイヤがその地主のもとを去ろうと願うな

ら、債務の返却に加えてかれらの家も放棄しなければならない。大抵の場合、カマイヤが持つ債務は相対的に小さく、二〇〇〇ネパール・ルピー（三六・〇〇USDドル）以下である。しかし、現金収入がないので、これは実質的に返却不可能である。負債は父から息子へ相続され受け継がれる。

地主はカマイヤを脅すために口での威嚇や屈辱をくわえる。カマイヤは肉体的虐待を報告するのをいやがるが、暴力も使われているのは明らかである。カンチャンプル郡では、使用者による病氣治療についてのインセックの質問に応えたこれらカマイヤのうち、一四％が打擲を受けたことがあると言った。⁽¹¹⁾

カマイヤに対する暴力

クシ・ラム・タルーはバルディヤ郡のラジャプルVDCに住み、カマイヤとして働いている。二四歳だが、子供の時から同じ地主、ラジャ・ラム・シンのために働いている。家族はかれの祖父のときからずっと束縛されている。最初かれの祖父はたった数千ルピーのローンを借りた。かれは最初報復を恐れて話をするのをいやがった。

わたしはラジャ・ラムによって全身を打たれた日のことをまだ覚えていいる。父はかれの家でカマイヤとして働いていた。わたしは働くよう求められたとき拒否した。しかし働くことを強制された。わたしは言った。「わたしはとても若い。このようなきつい仕事をすることはできない」。しかしかれはわたしを強制し選択はない、と言った。わたしは逃げたが境界のところまでつかまり連れ戻された。かれはわたしの身体がはれあがるまで打った。四日間ベッドから動くことができなかった。わたしが連れ戻されたときかれは言った。もし逃げようとしたらわたしを殺し、川へ投げ込むと。⁽¹²⁾

同じように、スヌルア・タルーという同じVDC出身の中年の男性もまた、どのようにして地主によって暴力を受け辱められたかを述べた。

かつてわたしは去勢雄牛のカートでラジャプルまで米穀を運んでいたが、カートがコントロールを失った。そのため、かれはみんなの前でわたしを打った。わたしは話すこともできなかつたし、声も出さなかつた。ただ黙って涙を流すだけだった。

別のときには、ロープ・ベッドを作らないといつて打たれた。あらゆるロープを調べたが棒と脚を作るための木を与えられなかつた。木なしにどうしてベッドを作れようか。⁽¹³⁾

一般に、地主は、カマイヤが家内作業や他の農業上の任務のために、妻や他の女性の親族を提供するように要求する。その女性は、義理の娘であれ、妻であれ母であれ、ブクライと呼ばれる。

カマイヤはすべての耕作や激しい田畑仕事をする。かれらは通常田畑で食事を受け取って一二時間連続して働く。しかしながら、収穫や耕作の時期は、しばしば一度に数週間の間夜間作業二〇時間の日々を続ける。オフシーズンには、かれらは他の仕事を与えられるか、貸し付けられるか、あるいは地主の友人あるいは親戚のもとへ貸し出される。かれらは他のところで自由に賃労働を求めて働くことができない。

ブクライは家内の召使いとして地主の家で働く。しかしまた、農場生産物を加工し、繁忙期には田畑で働く。彼女らは男性と同じ時間を働くが、その上、帰ってきたときは家庭内で第二ラウンドの家内の任務を遂行しなくてはならない。

- (1) Mishra, S., 1994. *Voice of the Voiceless* (Video), INSEC, Kathmandu.
- (2) Bista, D. B., 1967. p. 119, *op. cit.*
- (3) Central Bureau of Statistics, 1992. *National Population Census of 1991, his Majesty's Government National Planning Commission Secretariat, Kathmandu.* からの推計。
- (4) Skar, H. O., 1991. *Nepal Indigenous Issues and Civil Rights: the Plight of the Rana Tharu*, pp. 15-16, Norwegian Institute of International Affairs, Oslo.
- (5) Rankin, K., in H. O. Skar (Ed.), *Tharu and Tarain Neighbours*, in press.
- (6) 一九九五年一〇月に A S I - I N S E C が行った調査から。

- (7) Landless Settlers' Problem Resolution Commission, 1995. *Survey on Landless Bonded Labour* (Kamaiya): A Report, p. 2. His Majesty's Government of Nepal, Kathmandu.
- (8) 一九九五年一〇月にASI・INSECのおこなった調査から。
- (9) 同上。
- (10) Landless Settlers' Problem Resolution Commission, 1995. p. 12, op. cit.
- (11) INSEC, 1992. p. 68, op. cit.
- (12) Mishra, S., 1994. *Women Bonded Labour in Nepal*, 未公開。INSEC, Kathmandu.
- (13) 同上。

第四章 奴隷的労働システムの女性と子供

階級やあるいはカーストにかかわらず、女性はネパールの農村において最も抑圧されたグループのひとつである。男性に比べて、女性は長時間働く。女性の一日の平均的労働負担は男性の七・五時間に比べて、一〇・八時間と見積もられる。⁽¹⁾

労働集約的な農作業の大部分は女性によっておこなわれる—種まき、若苗の移植、除草、収穫、それに穀物加工。唯一の例外は耕作であって、それはもっぱら男性の仕事である。女性は男性よりも労働に関する日給の割合は低く支払われるし、受け取る食料の部分も少ない。長時間労働のために女性のカロリーの必要性はより高いにもかかわらず、である。

都市部では、少女は教育に関してプライオリティがあるとはみなされず、少年よりも小さい年代で働き始め、子供の世話や他の家庭内の義務を負担して母親を助ける。教育へのアクセスが欠如していることは、地元での意志決定過程において女性がめったに代表されることのない多くの理由のひとつなのである。

ハリヤ・システムにおける女性たち

アンピカ・ロパ・サルキは三五歳という年齢よりもずっと老けてみえる。彼女はローカーストで女性であり、かつネパールでは不幸な組合せの人である寡婦である。

わたしには土地も家も夫もない。四人の子供がいて世話をしなければならぬ。ひとり腕を折っている。わたしにながで
きよう。

彼女にとって唯一の選択は労働者として働くことである。彼女の二三歳の娘が他の子供たちの世話をする。最も若いのが五歳である。

アンピカはウダヤプル郡トゥルペサウルVDCで働いている。彼女は見出すことのできるどんな仕事もする。「アンタツチャプル」
として、家内仕事を得ることは困難であり、それで主に農業労働者として働く。たとえ耕作を除くあらゆる種類の野外仕事を引き
受けるとしても、女性だとして彼女が支払われるのは男性賃金の半分である。これは日に一五ネパール・ルピー(〇・二六USD
ル)と三度の食事ということになる。ネパールの寡婦として彼女は汚名を受け、別の夫を見つけることなどありそうにない。夫な
しでは家を見つけることは困難である。地主は耕すために人びとを必要とするが、女性は耕さない。それで彼女たちは住む場所を
獲得しないのである。

ちょうど今、カトマンドゥウに行っている人が私に住む小屋を貸してくれている。かれらが戻ってきたとき行き場がわたしに
はわからない。財産をもっていないからローンを得ることができないのだ。でも絶望的な時には、⁽²⁾ときどきわたしの賃金で前借
を頼むことができる。

女性は耕すことがほとんどないのでハリヤとは呼ばれない。しかし、それにもかかわらず、彼女たちは農作業に深くかかわって
いる。家族すべてが米作期間に手伝いをする。妻たちはハリヤがよりすばやく終えて、自身の一片の土地ないしは家庭菜園で働け
るように仕事をしなければならぬ。彼女たちは支払われない。⁽³⁾デイル・バドウル・タディングによれば、これはパルバト郡で動
いているシステムなのである。

女性たちは働かなければならない。それは収穫の間での伝統なのだ。彼女らは働く時には食事を得る。彼女らはまた他の時には賃金労働をおこなうが、耕さないので半分の支払いを得るだけである。⁽⁴⁾

女たちは収穫物を取り入れ、肥料を田畑へ運び、そして動物のために飼料を集める。彼女らは地主の土地で、たまたし持っているれば自身の土地で働く。これはもちろん家でなされねばならないすべての家庭内の雑用や、焚き木を集めたり、食事の用意をしたり、若い子供たちの世話をするのに費やされる多くの時間に付加されるものである。オフシーズンになって夫たちが仕事を探して移住する時には、すべての負担が家族のなかの女性にかかってくる。できるだけうまく帳尻をあわせることが期待される。

ハルディヤ（東部テライ）では、男が移住するとき、通常女が家に留まり、彼女らができる仕事を手に入れ、また子供たちの世話をする。夫たちが家へ送ってくるお金は、しかしながら必ずしも彼女らに届かず、しばしば夫が帰ってくるまでローンを組むことを余儀なくされる。

ブチリ・ダス・チョーダリーは、夫がテライあるいはパンジャブに行くとき、かれはクーリエあるいは友人によって家へお金を送ろうとする、と言う。

かれは通常数百のインド・ルピーを送ってくるが、しばしば金額がここには来ない。昨年かれは一〇〇〇ルピー（二八・〇〇 USD）を送ったが、わたしはたった二〇〇（五・七〇 USD）しか得なかった。クーリエが取るからだ。

ハリヤの妻は起きている時間すべて働くと言うのは誇張ではない。しかしそれが何を意味するかを想像することは極めて困難である。

休憩時間？われわれには休憩時間はない。寝る時間だけだ。耕作を除くすべての仕事をやる。地主の家でもすべての家内仕事をやる。水運び、料理、子供たちを学校に送ることを。同様に我々自身の家のために、料理、洗濯、田畑仕事…（穀物の）あお

き分けや脱穀など、すべてをやる。それから子供たちの世話⁽⁵⁾。

子供の誕生後六日から一二日の間、女たちは休みを認められるが、それも一年の時期によるし、どんな仕事もする必要がある。しばしば彼女らは子供を産んだ後ちようど三日間で、外へ出て収穫物を取り入れるために働かねばならない。

カマイヤ・システムにおける女性たち

カマイヤ・システムの内部では、女性たちは奴隷状態の二倍の犠牲者である。ブクライ（カマイヤ・システムにおける女性の隷的労働者）は、その男性パートナーと地主によって取り決められた契約の当事者ではない。彼女らはその仕事に対して直接的報酬を受け取るのではなく、日々の食事を受け取るだけである。ときどき彼女らは、地主またはその妻から古着あるいは一定の長さの布をもらうかもしれない。

（写真略、キャプション…バングルのために働く—中西部ネパール、ダンク郡出のブクライ）

八歳から一六歳までの未婚の少女たちは、ときどき地主の家でもっぱら働くために連れて行かれ、カマイヤ・システムにおけるオルゴニヤとして言及される。このような少女たちは性的虐待を受けやすい。女の隷的労働者の性的虐待は広く認められているが、個々の事例はめったに報告されることはない。バルディヤ郡のある村からの恥すべき事例では、すべての新婚のカマイヤの花嫁は、初夜に村の地主とまず寝なければならなかった。当該地主は後にその話がより広く公衆の注目を浴びるようになった時屈辱を受けたが、公式の処罰を一度も受けたことがない⁽⁶⁾。

もしブクライが寡婦になれば、彼女の将来はとても不確実なものになる。たとえば、三二歳のランパティ・チョーグリーには五人の小さな子供たちがいる。彼女の夫は地主の田畑で作業中に死んだ。彼ら両方とも地主のC・K・シンのために四年間働いていた。現在かれは彼女がブクライをやめ、負債を返済することを要求している。かれは説明した。

カマイヤがいなくてブクライだけでいくことは利益がない。なぜなら彼女は土地を耕すことができないからだ。

ラル・クマリ・タルーは一九歳。彼女は地主のアヨテサのブクライである。かれは中西部ネパールのバンケ郡ナンバスタVDCに一八ピガの土地（二二ヘクタール）を持っている。地主はかれの土地の中に全部で五つのカマイヤの家族を持っている。ラム・クマリは父親ロハリ・タルーとペアを組んでいる。彼女は一三歳で母親からブクライとしての地位を受け継いだ。

家族の負債は二〇〇〇ネパール・ルピー（三六・〇〇USDル）で、かれらは負債が増加しているのか減少しているのかしららない。

わたしは地主の家で清掃仕事をしており、今は収穫期だから、暗くなるまで終日田畑にいる。昼ご飯に三〇分の休みをもつ。わたしの仕事に支払われるべきだーカマイヤとちょうど同じように働いているのだ。そのことがとても悲しい。

ラム・クマリは直接的な報酬を何ら受けない。衣類も得たことがない。毎年彼女はその労働に対して一ダースのガラスのバングルを受け取る。⁽⁷⁾

ランパティはとても困窮していて、どうしたらよいかわからない。彼女は唯一の選択肢は乞食だと言っている。⁽⁸⁾

女性のカマイヤとしてのパートナーを見つけようとするこの圧力は、子供婚の慣行に導く。若い息子たちは、その妻がブクライとして働くことができ、その母親になんらかの救いを与えられるように年上の女性と結婚するだろう。一八歳のアスラニはバルディア郡のラジャ・ラム・チャンダスの家でブクライとして働く。彼女は、義理の母にブクライとしてとって代われるように、一三歳のサンタ・ピールと結婚している。アスラニはブクライとして働く一方で、その夫は学校へ行き、勉強して⁽⁹⁾いて第五学年である。

奴隷的労働システムにおける子供たち

タラ・ラム・ロハールは一三歳で、地主の田畑でハリヤとして兄のマダン・ラム・ロハールを助けはじめた。

わたしは一年前に働きはじめた。まだ学校に行っているが、それはだんだん難しくなっている。兄が耕している時わたしは角の溝掘りの仕事をする。収穫時には手伝う。働く時には食事を得る。

ハリヤの子供たちが学校へ行くことはまれであり、小学校教育を終えることがほとんどない。子供たちの幾人かを学校へ送るのは、ハリヤの家族の半分以下である。⁽¹⁰⁾ 家族への圧力はこのようなもので、子供たちは、できるときには、その食べ物のために働かなければならないし、あるいは家庭内の義務で手伝わなければならない。女の子に与えられる仕事の量は特に重い。

たとえ家族のメンバーとハリヤの地主との間に特別な契約がない場合であっても、多くの場合、家族全体が地主に束縛されているとみなされ、こうして何時でも労働を提供するよう要求されるかもしれない。

一般的には、カマイヤの子供たちは地主の牛を見張るため牛飼いとして雇われている。そのためかれらは食事以外は受け取らない。しかしながら時々、自分名義でかれらは束縛されるようになる。このことは、片親あるいは両親の死後、子供が負債の重荷を相続する場合に、特に生ずる。インセックの一九九一年調査で接触したカマイヤの約六から七%は、一〇歳以下の時にカマイヤとして働き始めた。さらに二〇〜二五%は一〇歳から一四歳の間に働き始めた。⁽¹¹⁾ 孤児になったカマイヤの子供たちは最も悪い種類の搾取にとってもあいやすくなる。タルーNGOの後進的社会教育(BASE)は、一九九〇年代初期に、自分名義でカマイヤになっている五歳から一二歳の五九二〇人を特定した。そのうちの約四〇〇人は孤児であった。⁽¹²⁾

一二歳のアシラム・チョーダリーはシュレプル・マジゴアンのカマイヤである。かれの父が死に、兄が逃げ出して、母親(五歳)と二人の弟(一〇歳と八歳)をみる責任がかれとかれの成人した姉(二〇歳)にかかっている。かれは負っている一万四〇〇〇ネパール・ルピー(二五二・〇〇USD)の負債について知ることさえない。かれは、いかなる種類の支払いも受けることなく、食事のただけで働くことを余儀なくされている。かれの母と姉は地主の家で働く一方、アシラムは、兄弟とともに牛に草を食わせている。かれは地主によって打擲にあっており、かれの姉が性的に搾取されていると言っている。⁽¹³⁾

- (1) Oxfam, 1990. *Nepal Programme Review*, Oxford.
- (2) 同上。
- (3) 一九九五年一〇月にA S I・I N S E Cがおこなった調査から。
- (4) 一九九五年一二月にA S I・I N S E Cがおこなった調査から。
- (5) 一九九六年一月にA S I・I N S E Cがおこなった調査から。
- (6) Mishra, S., op. cit.
- (7) 一九九五年一〇月にA S I・I N S E Cがおこなった調査から。
- (8) Mishra, S., op. cit.
- (9) 同上。
- (10) A S I・I N S E Cの調査からの情報。
- (11) INSEC, 1992. *Bonded Labour in Nepal under Kamaya System*, p. 54, INSEC, Kathmandu.
- (12) Backward Society Education (BASE), 1994. *Tharu Education for Transformation*, Third Year Report (submitted to DANIDA), Dang. Appendix 10/10/95.
- (13) INSEC, 1992, p. 106, op. cit.

第五章 日雇い賃金のハリヤ

ビル・ラル・ライ

ビル・ラル・ライは六二歳。かれの顔はやつれ年でしわが寄っている。ほろほろのタンパンを着、つぶれたコールテンの帽子をかぶり、夜気から自身を守るために毛布をかぶっている。この五年間、かれはウダヤプル郡のトゥペシャウルV D Cに住んでいる。かれの掘っ立て小屋は東部ヒマヤラ山脈を流れるサプタ・コシ川の土手の近くにある無断居住者の土地に建てられている。妻と四人の子供がいる。

わたしはホジプルに生まれて、それからパトライに行き、最後にここに来た。私自身の土地を持っていないので、ハリヤとして働いている。

わたしは、農作業のすべてをこなし、もし得られれば他のどんな労働仕事もやる。労働作業でわたしは一日に三〇ネパールルピー(〇・五〇USドル)と食事を得る。耕作では相場は半日で二五ネパールルピー(〇・四〇USドル)である。こんななにかつい仕事だからだ。かれらは耕作と残りすべてに対して、わたしに二マナの米(三〇ネパールルピーまたは〇・五〇USドル)をくれる。

ええ、負債はある。ええと…約二二〇〇ネパールルピー(二二・〇〇USドル)。この時期には田畑仕事がないので、生きるためにローンを借り入れなければならない。人生はきびしい。それはまさにこのようなものなのだ。ある金貸しが干上がるときには、別のを探さなければならぬ。わたしは一月に五%で三人の異なった人からローンを借りている。ちょうど今わたしは支払いをする(1)ことができる。

労働の供給が豊富で安価であれば、地主は必要な日まで賃金労働者を雇用する。この慣行はネパール全体を通じて見られるが、多くの貧困な土地を持たない移住者がいる郡において特に一般的である。多くの点で、日雇い賃金で働くハリヤは、他のシステムのもとで雇われている人びとよりも自由である。というのは、ハリヤを地主のもとに縛り付ける直接的なメカニズムがないからである。その代わり、地主は土地を持たない、あるいは実質的に土地を持たない労働者のみじめな貧困に依存でき、着実な労働の供給を確保するのである。皮肉なことに、地主が安価な労働のためにその必要性を満たすべく債務奴隷制度を用いる必要がないのは、まさに労働者の相対的剰余があるからなのである。

オフシーズンで他の十分な雇用機会のあるところでは、ハリヤは生存することができる。たとえハリヤが乗り切るために金貸しから負債を借りることを余儀なくされるとしても、これらのものは何とか工夫できるし、利息の支払いはインドあるいはカトマン

ドゥでの移住労働で稼いだお金で満たされうる。しかしながら、しばしば予期しない事情、あるいは選択的雇用機会の欠如が、ハリヤをして負債に対する労働を無理にも誓わせ、そして日雇い賃金システムは、より性質の悪い奴隷形態に道を譲りはじめるのである。日雇い賃金システムのこの局面、しばしばそれが奴隷的労働の前兆であるという事実が、それをここでの議論と関連せしめるのである。

テライの賃金労働

テライの土地なしの人びとは多くの異なったカーストや背景から来ている。丘陵部から移住した「アンタツチャブル」出身もいれば、テライの低い地位の部族グループの住民の出自もいる。土地を失ったハイカーストの農場主さえもいる。貧困は偉大なる平等者なので、東部テライの土地を持たない人びとの間には、バラモンがハリヤとして働いているのを見出すこともできるのである。もしかれらが家を建てるための一片の土地を親類から得ることができなければ、たいいていのものは、森のへり、あるいは、大きな川の土手のそばにある洪水に遭いやすい質のよくない土地に違法に無断居住するであろう。これは、環境的条件のためにだけでなく、また保有の違法性がかれらを地方当局からの圧力を受けやすくしているという理由もあって、不安定な生活である。

東部テライ、ウダヤブルのハルディヤ村

賃金労働の支配的相場は、村によって大きなヴァリエーションがある。ビル・ラル・ライの住むトウペシャウル約二〇キロメートル東、ウダヤブル郡のハルディヤVDCでは、日雇い賃金のハリヤはたいいていタルーである。家用の小さな登録された土地を持ち、こうしてトウペシャウルの隣人よりも安定しているものもある。その結果、相場はより高い。支配的なレートは一日に三〇ネパール・ルピー（〇・五〇USD）であるが、それに加えてハリヤは三度の食事（追加の一〇〜一五ネパール・ルピーあるいは〇・二五USDに匹敵する）を受け取る。ハルディヤのハリヤはたいいてい年のうち最大限六ヶ月間そこで働く。時々地主は三ヶ月から六ヶ月の短期の契約をするのだが、そのケースでは、ハリヤは雇用の増大する安定性を相殺するためにより低い賃金を受け取る。ただ一人のハリヤが一〇ヶ月続く契約の下で働いていた。かれは年に七二〇キロの米（三六〇〇ネパール・ルピーあるいは六五・〇〇USDに匹敵）と日々の食事を支払われることになっていった。オフシーズンの間、ハルディヤのハリヤはたいいてい労働仕事やポーターの仕事を探してインドあるいはカトマンドゥに移住する。

カトマンドゥでは、人びとは一日に六〇ネパール・ルピー（一・一〇USドル）を稼ぐことができ、デリーあるいはパンジャブでは九〇ネパール・ルピー（一・六〇USドル）に等しいものを得る。仕事を見つけていることができるといつでも考えているので、かれらは通常差し引き損得なしでとんとんに終わることもできる。いくつかのケースでは、ハルディヤ出自の日雇い賃金労働のハリヤの家族は、いくらか成功して畜産業をはじめめるために、ローンを得ることができた。

丘陵部の賃金労働

丘陵部では、日雇い賃金のハリヤの多数はローカースト集団、特にロハール、カミ（鍛冶屋）、サルキ（皮革労働者）、それにタマイ（仕立て屋）の出自である。テライの人びとと対照的にハリヤは大変しばしば自分自身のいくらかの土地（約〇・一ヘクタールまで）を持っている。理論的には、このことはかれらに少しばかりの安定をあたえる。たとえ、土地がしばしば抵当に入っているとしてもである。西部丘陵における他の大きな相違は、ここではカースト差別がとても厳格に適用されている、ということである。

西部地域のバルバト郡、シルミ

シルミはバルバト郡のクスマーポカラ間の道路から歩いて一時間の、丘陵部のサルキ（皮革労働者）の村である。そこには現在四二家族が住んでいる。もはや皮革労働という伝統的エリアで働いているものはだれもない。ますます多くの数の若者がインドに移住し、家庭内召使いはガードマンとして働き、時々一年あるいは二年の間留守にする。他のものはポーターとして働くが、道路で仕事する者もいれば、季節的なハリヤとして働く者もいる。

たいていの家族は、一あるいは二ヶ月間家族を持ちこたえるために生産する小片の土地（だいたい〇・一ヘクタール）を持っている。しかしながら、土地で担保された五〇〇〇から三万五〇〇〇ネパール・ルピー（九〇・〇〇—六三五・〇〇USドル）にわたる高度の負債がある。ハリヤは非常にしばしば物納小作人として抵当に入れた土地で働きつづけ、かれらが生産する穀物の半分を、ローンの利息部分の代わりに金貸しに与えるであろう。

カースト・システムは厳しく施行されており、カースト差別がおこなわれている。慣習はより低いカーストがコミュニティ全体のために耕作作業を実行するよう要求する。チャルドラ・ネパリ（五五歳）は一二歳の時からずっと日雇い賃金のハリヤとして働

いている。九—一〇時間でかれは三〇ネパール・ルピー（〇・五〇USDドル）と一回の食事を得る。

われわれはカーストのために差別されている。そしてわれわれはハリヤとして働かなければならない。ハイカーストの地主は誰も耕さない。かれらは茶を飲むだけで全然働かない。

丘陵部では、たとえハリヤが地主に債務で縛られていないとしても、かれらは一般的に地元の金貸しにひどく負債を借りている。最後の掘り所として、かれらは最後にローンのためにかれらの地主に向かうだろう。それからかれらはその債務の利息を支払うために働きはじめ、そして前の諸章で記されたように奴隷的労働者として容赦なく仕事にひきこまれる。テライでは、日雇い賃金のハリヤの多数は、土地を全然持つておらず、屋根の追求はしばかれらを地主の土地の上で生活し労働するようにする。こうしてシステムは多くの封建的な特徴を持つのである。

(I) 一九九六年一月にASI・INSECがおこなった調査から。

(以下次号)